



教員特別研究（重点研究）成果報告書 | 配分研究費：2,540千円

病院のアートを紹介した人々の社会的関わりとその環境のデザインに関する研究

目的・概要

本研究では、昨今、多方で取り組まれている病院のアート（ホスピタルアート）について、その立案・運営・実施を通じ、関与する人々が相互に作用し合うことで、病院環境がどのように変化するかを目的に、〔参加型〕、〔鑑賞型〕、〔参加＋鑑賞型〕のプロジェクトを立案・試行しながら研究を進めた。その上で、病院といった特殊な環境に関わるさまざまな人々の、新たな関係性を創造しうる「開かれたアート」について考察した。

期間

令和2年4月1日～令和6年3月31日

研究担当者

デザイン学部 デザイン学科 教授 藤井 尚子（研究代表者）
文化政策学部 芸術文化学科 教授 高島 知佐子

スケジュール

令和2年度	(COVID-19の規制により研究計画を繰延べ) A「教育活動を主軸に関与する事例」の形成 ・浜松科学館×学生（HAPS）×静岡県立こども病院による展覧会の実施「星のランプの展覧会」 ・静岡県立こども病院×学生（HAPS）によるオンラインワークショップの実施「絵を描こう森のお祭り」
令和3年度	A「教育活動を主軸に関与する事例」の形成 ・磐田市立総合病院×学生（HAPS）によるワークショップの実施「マスキングアートを使ったホスピタルアート」（全2回） ・他事例地との情報交換（オンライン）
令和4年度	A「教育活動を主軸に関与する事例」の形成 ・磐田市立総合病院×学生（HAPS）によるワークショップの実施「つながるまるぼんワークショップ（手術室前の空間装飾）」全2回 ・静岡県立こども病院×個人財団（一般社団法人木梨憲武財団）×学生（HAPS） 「みんなのカラフルさんぽみち」（長い廊下を会場にした絵画展） B.「アート活動を主軸に関与する事例」の形成 ・浜松医療センター×建設会社×アートマネジメント会社×研究代表者 アートマネジメント会社との打ち合わせ・計画、サンプル制作、プレゼンテーションの実施
令和5年度	A「教育活動を主軸に関与する事例」の形成 ・磐田市立総合病院×学生（HAPS）によるワークショップの実施「周産期センター分娩室の装飾」全2回 ・静岡県立こども病院×個人財団（一般社団法人木梨憲武財団）×学生（HAPS） 「みんなのカラフルさんぽみち」（長い廊下を会場にした絵画展）（令和4年度の続き） B.「アート活動を主軸に関与する事例」の形成 ・浜松医療センター×建設会社×アートマネジメント会社×研究代表者〔アンケート調査を実施、実践報告を研究紀要に投稿〕

研究成果

病院の協力のもと「実践的手法」（以下、WS）にて、A.「教育活動を主軸に関与する事例」（事例1：磐田市立総合病院WS〔参加型〕、事例2：静岡県立こども病院WS〔鑑賞型〕）とB.「アート活動を主軸に関与する事例」（事例3：浜松医療センターAW・WS〔参加型＋鑑賞型〕）それぞれのホスピタルアートをめぐる関係性の考察を進めた。特に、病院に関わる人間環境をポジティブに変化させる関わりに着目し、それぞれのホスピタルアートの有意性について検討を試みた。

事例1・2では、企画を検討する過程で、患者目線での思考を促し、患者目線での職員間の情報共有や新たな気づきにつながることがわかった。活動を重ねるにつれて、企画や具体的な内容を決める際の職員の打ち合わせは、複数部署の職員が参加するようになった。企画の決定には、使用する材料や装飾の形状、位置を患者目線で考え、安全性を検討、さらには消防法上の問題がないかも確認が必要となる。故に、関係する部署の職員が集まり検討する、または病院の委員会組織等で諮る方が効率的だということがわかってきた。このようなホスピタルアートのプロセスにおいて職員は「他部署ではそういうことが起こっているのか」「そんなことを考えていたのか」と互いの仕事内容や視点を知る機会になっていることが窺えた。

事例3は、新建築に伴うホスピタルアートの導入事例であり、病院部外者が多く関わるため、病院職員の主体性が希薄になりがちである点が窺えた。病院職員自身が主体的存在であることを自覚できるよう、その一手段としてホスピタルアートをを用いている。そのため、WSのプロセスを重視し、達成感と期待感を感じられるような工夫が必要であることが明らかとなった。



今後の研究成果の還元方法

本研究では、研究分担者それぞれのアプローチによる事例形成を試み、それぞれの成果より有意な知見を得ることができた。研究の次なる段階では、これらの知見を統合し言語化・可視化する必要がある。言語化・可視化に向け、まずは研究分担者の情報共有及び関係者の意見交換の機会を設けた上で、当初、最終年度の研究計画で実現できなかったシンポジウムの開催を目指す。シンポジウムでは、ホスピタルアートに期待する役割や、実際に参加した事による気づきなどをテーマに、多様な立場と観点からディスカッションを行う。その上で、ホスピタルアートを緩衝に相互の考えを知りコミットするポジティブな関係構築の可能性に言及した冊子媒体の作成を通して還元を試みたい。